

# 芭蕉の道と たどる

堺田―清川踏査同行記

俳聖松尾芭蕉が曾良を伴い一六八九（元禄二）年に奥内を歩いた「奥の細道」の旅から、来年で三百二十年。観光振興やまちづくりの観点からその旅を見つめ直し、可能性と課題を検証しようと、東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」メンバーがこのほど、最上町―庄内町間を踏査し芭蕉の足跡をたどった。以下はその同行記。

（文）報道部・笹原健一、写真）同・色摩高幸

芭蕉が最上町堺田から尾花沢に入ったのは、今の暦で七月三日。紅花も咲く夏だったが、踏査一行は気温零度まで冷えた朝、堺田の旧有路家「封人の家」で案内役の町職員後藤昌広さん(55)と合流した。

蚤虱馬の尿する枕もと

いぶされたのが心地よい江戸初期の建物を出発し、山刀伐なたぎり越えへ。県道トンネル脇から芭蕉の道を復元した「歴史の道」に入った。「人馬のあまり通らない峠で芭蕉は追いはぎに遭わないよう相当急いだよつです」と後藤さん。年齢の割に驚異的なスピードで移動したとして、芭蕉「隠密」説すらあるが、山賊を警戒し



こけむした石段が歴史の道を感じさせる山刀伐峠。整備されて比較的、歩きやすい。最上町



大雨に芭蕉が足止めされ投宿した封人の家は、奥の細道の行程で当時のまま現存する数少ない建物だ

最上町堺田

の枝に隠れ、慣れた後藤さんの先導がなければ迷うところだ。だが、あえて矢口さんは指摘する。「事前に役場に聞いた際、

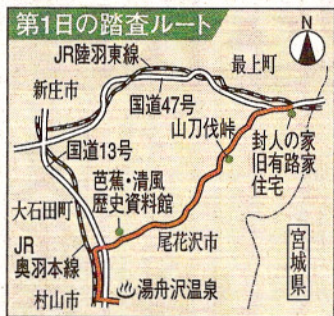
## 義経北国落ちを追体験

### 行政の連携不足に苦言

急いだ姿は容易に想像できる。そもそも芭蕉は平泉に落ちのび

た源義経主従の伝説に心を動かさすよ」と後藤さん。舗装路を少し戻って再びやぶに分け入り、子宝

た源義経主従の伝説に心を動かさすよ」と後藤さん。舗装路を少し戻って再びやぶに分け入り、子宝とされる。あえて修験の道、難地蔵や子持杉、芭蕉碑のある広所の山刀伐越えを選んだのも、追場に出た。「車なら本当の山頂に体験が狙いと分析する研究者は、気付かなかったかも」と、踏査メンバーの阿部智信さん(33)。「山梨の湯舟温泉へ。桜と新緑が一緒に楽しめる。芭蕉が歩いた夏より良いよ」「でも昔と違って十の道にトイレが一つもないのは困る」。鈴木清風にもなされた芭蕉のように、メンバーは旬の山菜に疲れを癒やされながら、芭蕉の道談義に花を咲かせた。



## 山刀伐峠越え



# 芭蕉の道と たどる

堺田―清川踏査同行記

芭蕉の道を踏査するまちづくりにグループ「元気・まちネット」一行が泊まった村山市の湯舟沢温泉に、尾花沢市歴史文化専門員の梅津保一さん(67)が駆け付けてくれた。遅くまで芭蕉談義で盛り上がり、翌朝JR袖崎駅まで送ってくれた梅津さんは、興味深い話をしてくれた。「尾花沢で清風に勧められ山寺を訪ねた芭蕉は、立石寺で死者の霊に接することになる。旅の大きなポイントだよ」

閑さや岩にしみ入蟬の声  
踏査一行がJR仙山線で降り立った山寺は快晴。山門をくぐり、せみ塚、弥陀(みだ)洞などを回り奥の院まで登った。五大堂の絶景を楽しみながら、句に登場するのは何ゼミかの論争を一蹴(いっしゅう)した梅津さんの言葉思い出す。「芭蕉は本当のゼミを詠んでいない。義経落人体験が根底にあり、死者を葬る寺で霊に思いをはせ、現実でない「声」に耳を傾ける境地に至った」。さらにこう付け加えた。「芭蕉二十三歳の時に他界した同郷の師、藤堂良忠



## 山寺・立石寺

の俳号が「蟬吟(せんぎん)」。「芭蕉を俳諧に導き、その死が転機となった人物で、奥の細道紀行の元禄二年は良忠二十三回忌の因縁深い年。芭蕉は「蟬」に特別な思いを込めたんだ」

下山後に山寺芭蕉記念館を訪ねると、相原一士学芸員は「日本には虫に霊が宿るとする「移し身」の思想があり、ゼミと霊を結び付ける考え方も一理あるでしょう

# 蟬の声は死者の声？

## 点の観光地を線、面に

ね」と分析する。一方、立石寺のは尾花沢から山寺まで、その間七清原正田副住職59)は「伊賀上野里ばかり」としか記しておらず、国の「蟬吟」と句の符合も本当のどこを通ったか定かでありませんと馬で移動しただけでも言われ、と指摘。芭蕉が羽州街道を南下後、謎はまたまた多いです」と解説した。

現在、残っていない点にも「芭蕉 元気・まちネット代表の矢口正

武さん(61)は「これだけ有名な山寺にも多く残された謎が、旅を数倍楽しくしてくれる」と感慨深げ。ただ、今いろいろな角度から山寺の下調べをした中で、「有名な観光地ほど関係機関・団体が分業化、細分化されるのは問題。行政も観光業界も住民も立場を超えて連携し、点の観光資源を「線」や「面」につなげる取り組みが必要ですね」と強調した。



観光シーズンに入り上り下りする観光客が多い立石寺。芭蕉が訪れた季節はもう少し先

山形市山寺

立石寺根本中堂の前で芭蕉がたどったルートなどを副住職と語り合った

山形市山寺



山寺を後にした一行は、東根市で羽州街道の名残をとどめる松の老木を見た後、芭蕉の道として地区挙げて整備している六田で「文四郎 魅」に立ち寄る。魅(ま)料理を味わわせてもらい、満足感に浸りながら次の宿泊地、戸沢村角川をめざした。(文)報道部・笹原健一、写真)同・色摩高幸)

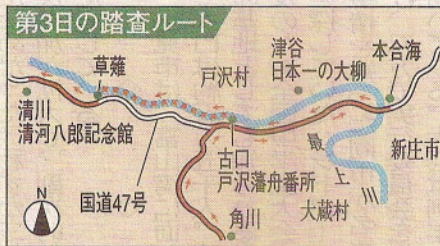


# 芭蕉の道と たどる

堺田―清川踏査同行記

今年、春秋二回に分けて芭蕉奥の細道紀行の県内ルート踏査に挑む東京のまちづくりグループ「元気・まちネット」。最上町堺田から庄内町清川まで前半部を踏査し、今回の最終日は、宿泊した戸沢村角川の民宿「三左衛門そば」からいったん芭蕉の最上川下り乗船の地となる新庄市本合海まで戻り、芭蕉と曾良の像や句碑を確かめた。

五月雨をあつめて早し最上川「本当。句にある通り流れが速いですね」と踏査メンバーの佐野千晶さん(左)と東京都渋谷区IIが感嘆の声。雪解け水が大量に流れ込む季節だけに、間近に見る川面は急流そのものだ。一行は義経主従上陸地となる対岸の景勝地「八向楯」にも足を延ばした後、戸沢村津谷にあるシロヤナギの巨木「日本一の大柳」もカメラに収めた。この日のメンバーは舟下り。同



## 下 最上川舟下り



芭蕉が舟で下った最上川を今はエンジン搭載の観光船が行き来する＝戸沢村古口

村古口の「戸沢藩舟番所」から草下船した一行は最上峡芭蕉ライオン観光業務部長を務める柿崎ナカ子さん(57)と懇談し「観光論にまだ多い」と振り返る。柿崎さんの語りで楽しく演出してくれただけでなく周辺を徒歩や自転車で出すべきですね」。この日同行した戸沢村職員前田公平さん(51)も、「最上から庄内へのつながりが弱い点も行政が克服しなければならぬ課題」と話す。

# 3偉人時代超え交錯

## 物語性掘り下げ観光誘客

続いて訪ねた庄内町清川の清河の清河八郎記念館では、斎藤清館長(78)が芭蕉と義経、そして維新の浪士、清河八郎の三人が時代を超えて交錯する地・清川を、貴重な收藏品とともに紹介。「退職後に私も芭蕉の道歩きが実現できなくてね」と笑顔で打ち明けてくれた。矢口さんは「現代人が求めたのは単なる旅行でなく物語性。芭蕉も義経もバードも清河八郎も、地元がもっとストーリー性を深く掘り下げれば、さらにアピールできる観光資源になる」と、本県の観光誘客戦略に貴重な提言をしてくれた。



芭蕉乗船の地を訪れ、地元の人から説明を受ける「元気・まちネット」のメンバー＝新庄市本合海

「三賢者」をテーマに本県を全国発信しようと、二〇〇六年源義経北国落ちルート、〇七年に英旅行家イザベラ・バード紀行ルートの踏査に取り組んできた「元気・まちネット」。最終章、芭蕉の道の後半部は今秋、庄内から出羽三山踏査に臨む。

(文＝報道部・笹原健一、写真＝同・色摩高幸)

